

## 只見野鳥雑記 ⑥ (最終回)

### 先人の見識を

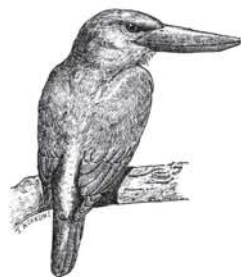
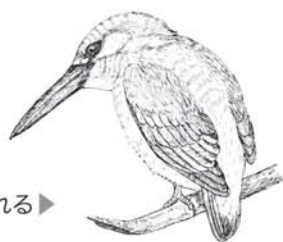
### つたえる方言

地域の伝統を引きつぐことにもなると思います。その意味もこめて、いまでは使われなくなった只見町の鳥類方言をご紹介します。



▲チューマ、ゲージェードリとよばれるムクドリ

ソナとよばれるカワセミ



コマドリ、ナンパンチョウとよばれるアカショウビン

学名という、動植物の正式な日本名と違って使う人がいます。たとえば「この鳥の学名は、ツバメです」と言うことがあります。正しい使い方はありません。学名とは国際命名規約によってつけられた世界共通の名称で、ラテン語で表記されます。日本国内で通用する名称は標準和名といます。それ以外の名前は別名、ある地域だけに通用する名前を方言名といえます。ツバメを例にすれば、学名は *Hirundo rustica*、標準和名はツバメ、只見町の方言名はツバクロとなります。情報を正確に伝えるために、万国共通の学名をつけることはたいせつなことです。一方、急速な国際化がすすんで地域固有の方言名は消えつつあります。このままでは独自の文化や価値観もなくなってしまうそうです。方言を残すことは、自分が生まれ育った

鳴き声からつけられたものでは、チューマまたはゲージェードリという鳥がいます。ムクドリのことで、どちらもさわがしい鳴き声を表現したものです。チューマは只見川沿いの集落で、ゲージェードリは伊南川沿いの集落でよばれます。全身が赤いアカショウビンは、コマドリとかナンパンチョウといいました。コマドリは和名でいうとツグミ科のコマドリのことですが、只見地方ではアカショウビンの鳴き声を駒(馬)のいななきに聞きなしたのです。この鳥が鳴くと、雨が降るといわれています。ナンパンチョウは、赤い身体を唐辛子の南蛮に見立てたか、あるいは外国から来た鳥ということの名付けたものでしょう。なお、ナンパンチョウという名前は、明和地区で使われます。また、トチハカリという鳥がいます。春、山中の林からカラカラカラ…という乾いた音が響きます。これが栃の実を升にあげる音に似ているので「栃秤り」

とよんだのです。じつはこれは鳴き声ではなく、キツツキ類が樹幹をついて、なわばり宣言のために出している音です。さらにサケビという正体不明の生き物がいます。初夏の夜、キヤーキヤーと鋭い声で鳴きます。この鳴き声の主はフクロウのヒナです。暗い森で自分のいる場所を親鳥に教えてエサをもらうために鳴きます。この声があると、「サケビが来つからはやく寝ろ」などといつて子どもを寝かしつけました。よく知られているカッコウは、カッポドリとよんでいました。いまでは見られなくなったヒクイナはカネツキドリといい、この鳥が田んぼに巣をつくと豊作になるといわれています。

色や姿から名づけられたものに、ヒアカシという鳥がいます。キビタキの雄の方言名で、おそろく喉の赤い色を「火明かし」と表現したものとされます。また、モンツキ

ガラスという鳥は、ブツポウソウのことです。翼に白い紋のあるガラスに似た鳥が林内を飛ぶのを評したものです。フウジロという鳥は、フウ(頬)が白いシジュウカラやヒガラを総称した方言名です。

古い名前(古名)がそのまま方言として残っているものもあります。シトドとはホオジロのことで辞典にも古名として載っています。同じ仲間のアオジはアオシトドとよんでいました。ソナという方言も古い名前です。カワセミのことです。ちなみにヤマセミはカーゲラとよんでいます。語源は不明ですが、カワラヒワのことをニクバシ、カイツブリはタカブといっていました。

これらの方言名は、『会津只見の方言』(只見町史資料集第5集)にくわしく掲載されています。方言名がわかると、先人の見識がわかり、いつそう愛着が深まります。



▲トチハカリとよばれるアオゲラ